

E-4 熱帯域におけるエコシステムマネジメントに関する研究

(3) 地域社会における生態系管理へのインセンティブ導入のための基礎研究

京都大学 地域研究統合情報センター

阿部健一

<研究協力者>

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科

内藤大輔

広島大学大学院総合科学研究科

奥田敏統

Center for Orang Asli Concerns

Colin Nicolas

平成 14～18 年度合計予算額 12,448 千円

(うち、平成 17 年度合計予算額 2,141 千円)

[要旨] 本研究では、多民族からなるマレーシア社会において日常的に森林との関わりを保ってきた少数先住民オランアスリーに焦点をあて、オランアスリーを取り巻く政策的な環境の変化や森の劣化が民族固有の文化・生活や森との関わり方に及ぼす影響について調査を行った。その結果、パイロットサイト内のオランアスリー集落では森林産物採取などの占める経済的な役割は根強く残っているものの、森自体の存在が文化的・精神的な拠り所として比重を増していることが確認された。また、こうしたオランアスリーと森林との関係が、経済社会的文化的背景の異なる地域でも普遍的に見られるのかについて広域調査を実施した。その結果、程度の差はあるが、調査を行った集落のほとんどが、かつてのように森林に生活の大部分を依拠しているわけではなく、たとえばゴム園・アブラヤシ園などの自営者・労働者として、生計を維持していることが明らかになった。こうした状況で、生態系管理のために必要なのは、社会的に経済活動の中心から周辺部へ追いやられ孤立しているオランアスリー社会を、どのように「外世界」と結びつけるのが課題であることが鮮明になった。すなわちオランアスリー社会と外の世界とつなぐ「媒介者」という役割が、外部のものに期待されていることが分かった。これまでの研究で、マレー農村社会が、かつての日本の農村と同様の急激な過疎化状態にあることも再認識されたが、森林に関しては、マレー系住民は、もはやまったくの外部者となっていることもわかった。すでに森の外部者となった、近代都市に居住する農村出身のマレー系の人々の間では、近年では開発一辺倒ではなく、先進国と同じ環境保全という考え方が徐々に浸透し、熱帯林保全への関心が高まりつつある。地域社会における生態系管理へのインセンティブ導入を図るときには、森に近いオランアスリー社会だけでなく、こうした環境保全意識の潜在的に高い人々を巻き込んだ「協働」が必要となると考えられた。すなわち、森林をとりまく社会環境・認識の変化の中で、オランアスリー社会のもつ森林保全への潜在的可能性を最大限に引き出す環境を整備（エンパワーメント）することが必要であることが示唆された。

[キーワード] オランアスリー、エンパワーメント、林産物、協働、住民参加

1. はじめに

熱帯林の「管理（マネジメント）」においては、市場や国家など様々なアクターがそれぞれのレベ

ル・立場で複雑に関与している。そのなかで、本サブテーマにおいては、地域住民こそが管理の主体であると考え、オランアスリー社会を対象に研究を進めてきた。オランアスリー社会は複合社会マレーシアのなかで生活の多くを森林に依存し、日常的に森林と関わっているとされる社会である。本研究では、本課題(E(4))のパイロットサイト内および周辺域に居住しているオランアスリーに対し、人類学的アプローチから、彼らが伝統的にも今日的にも、さらには現実的にも象徴的にも最も森林と「近接している」社会であることを明らかにしてきた。とりわけ同所的に存在していたマレー農村社会と比較することで、この点を鮮明にすることを目標とした。「地域住民」といっても現実にはさまざまである。「地域住民」をどう措定するかは研究の出発点であり、ある意味その帰結であるとも言える。マレーシアの「地域住民」はさまざまに分類可能である。たとえば、多民族国家マレーシアにおいては、民族による分類軸がまず考えられる。マレー人・中国人・インド人と、文化・歴史・社会的側面だけでなく、政治・経済的状况も「民族」性に強く反映されていると考えられる。また都市近郊居住者・農村居住者といった森林へのアクセスを軸とした区分もありえる。

こうした中、オランアスリーは、「真正の」という意味のマレー語であり、いわゆる「先住民」を意味する。マレーシア政府は1960年以降、国家の民族政策のなかでそれまでサカイやセマンなどと時には蔑称で呼ばれていた原住民グループを総称しオランアスリーと呼ぶことにした。オランアスリーは大きく、定住せずに狩猟採集を行うグループ、丘陵地で焼畑を行うグループ、半島南部の低地で森林産物の採集・漁労、時には定着農耕を営むグループと、言語・文化・生業の面で異なる3つのグループがある。また人口の面でも、数十人のグループから数万単位のグループまで、実に多様なグループが含まれている。

オランアスリー社会をわれわれが研究対象とした理由は以下の二つである。第一点は、その幅はあるものの、もっともその生活を森林に依存してきた民族（社会）グループであること、すなわちもっとも森林に物理的にも文化的にも「近い」人々であるということ、第二点目は、社会的な発言力に弱い周辺化・孤立化した（marginalized）グループであることである。森林への依存の点では、これまでオランアスリーはいわゆる「森の民」として、外部と隔絶した自給自足的な生活を営む民族と表象されてきた。しかし近年の歴史人類学的研究では、むしろ森林産物との交易を通じ周辺の民族と「共生的」にかかわってきたことが明らかになっている。今日ではさらに、現金経済の浸透とともに自給的な側面はますます希薄となり、森林産物の換金目的での採取が生活の中で大きな比重を占めるようになってきている。政策により定住化が図られていることも、生活・生業の変容に影響をあたえるものとして見逃せない。オランアスリーにとっての森林利用は過去との連続面はあるものの、今日まさに大きな変化のただなかにある。

オランアスリーは建前的にはブミプトラとして優遇政策の対象であるが、現実には弱者でありその発言が制度や政策に反映される機会はほとんどない。健全で自立した地域社会こそが、健全で持続的に森林と関わって行くことができる。地域社会に熱帯林保全のための役割を期待することは、当該地域社会をエンパワーメントすることにほかならない。このような前提に立つとき、オランアスリー社会はきわめて特異的であり、逆説的であるが、社会・経済・政治的に弱者であるがゆえに、オランアスリー社会を健全な森林保全に向けてエンパワーメントしてゆくことが重要となってくると考えられた。

2. 研究目的

(1) 地域社会の熱帯林保全へのインセンティブ導入をはかることを究極的な目標に据え、オランアス

リーとその集落社会に焦点をあて、森林と地域住民とのかかわりを明らかにする。

- (2) オランアスリー集落と近隣のマレー集落と比較することにより、オランアスリー社会と森林の結びつきを明らかにする。
- (3) 地域住民や社会のアイデンティティのよりどころとしての森林の存在価値を明らかにする。
- (4) 森と人との関わり合いについて経済社会的文化的背景の異なる他地域・他系統のオランアスリー社会間でどのような共通性が見られるか（普遍性）を明らかにする（スケールアップ）

3. 研究方法

参与観察を行ったのは本課題のパイロットサイト内（E4(1)①）およびマレーシア半島部国立公園内のオランアスリー集落である。すなわちアイル・バニン村（オランアスリー、テムムアン temuan 族）、短期の聞き取りを行ったウル・ラカイ村（オランアスリー、テムムアン族）とラカイ村（マレー系）に加え、あらたに、ブキット・タンポイ村（オランアスリー、テムムアン族）、ウル・グロ村（オランアスリー、セマイ Semai 族）、スンガイ・ブンブン村（オランアスリー、マ・メレ Mah Mere 族）、クアラ・ケニヤム村（オランアスリー、バツェック Batek 族）の4つの村・地域で短期聞き取り調査を行った。前3村での調査結果は既報であるが、最終報告書という今回の報告書の性格に鑑み、必要最小限の調査結果を再録した。パイロットサイトを調査地としたのは、本課題（E4）の他調査グループによる自然科学的調査がサイト内のパソ保護林および周辺域で重点的に行われている地域であり、1）過去20年以上にわたる、土地利用・植生に関する変化などの情報がすでに十分蓄積されている、および2）最終的に森林の「価値」を生態的価値と人文社会的価値の双方で総合的評価するさいのモデルケースになること、などの理由からである。

また、これまでに、先住民局、森林局、連邦国土調整局（Federal Land Consolidation and Rehabilitation Authority: FELCRA）、ゴム産業小農開発庁（Rubber Industry Smallholders Development Authority: RISDA）などの政府機関での聞き取り調査や村の開発に関わる資料収集も行っているが、こちらに関しては特に必要と思われる部分だけをとりだし、今回は割愛することにした。こうした調査は、調査村の選定や調査の枠組みを組み合わせるうえできわめて重要であった。

集中的調査を行ったアイル・バニン村での調査は、2004年6月から11月まで参与観察と基本的資料となる世帯調査をまず行っている。世帯調査における質問項目は、世帯構成から親族関係、学歴、生業、所有耕作地面積、結婚、宗教、電気・水道・電化製品・自動車・バイクの有無、狩猟採集（頻度、種類、場所など）である。狩猟採集活動における調査は可能な限り狩猟採集に同行し、観察、記録を観察、記録を行った。獲物の重さなどはバネばかりを使い計量した。さらに狩猟の場所はGPSで計測し記録している。アイル・バニン村以外の村でおこなった短期間の聞き取り調査では、非構造化した聞き取りを行った上で、基本的にアイル・バニン村での所帯調査と項目を重ねている。

オランアスリー社会の森林とのかかわりを相対化するため、調査対象地域内のマレー系集落（ラカイ村）で比較調査を行うことにした。同じ農村地域の集落といっても、マレー系とオランアスリーでは森林に対するかかわり方は異なるベクトルを持っていると感じられた。農村地域で大多数を占めるマレー系住民の意向は、今後のマレーシアの森林政策のなかで大きな比重を占めると考えられた。マレー系集落での調査は、結果としてマレーシア農村地域全体の森林とのかかわりをも明らかにすることになった。オランアスリー社会と森林の関わりは相対化され、その中に位置づけられることになった。

4. 結果・考察

(1) 調査村の概要

1) アイル・バニン村

アイル・バニン村（個人情報でもある詳細なデータがあるため、この村のみは仮名である）はヌグリ・スンビラン州、ジュルブ県に位置するテムアン族の村である。ヌグリ・スンビラン州はマレー半島を貫く中央山脈の南の縁に位置しており、平野部の大部分は開発の対象となり、ゴム園、油ヤシ園などに転換され、丘陵部分に森林保護区として断片的に森林が残されている。ジュルブ県はヌグリ・スンビラン州の北部に位置しており、南部に比べると比較的森林が残されている地域である。アイル・バニン村はゴム園、油ヤシ園に囲まれた村である。村の面積は 250 エーカーあり、そのうち約半分の 125.5 エーカーを政府系開発機関である連邦国土調整局（FELCRA）によって運営されている油ヤシ園が占めている。村の中央をプルタン川が流れており、生業にも重要な場所である。周りの地域に比べ少し低くなっており、雨期に大雨が続くとゴム園、油ヤシ園は水に浸ってしまうほどである。調査村周辺の森林地域としては東にパソ森林保護区、西にクランガイ森林保護区がある。これらの森林はフタバガキ科の樹木を中心とした低地熱帯林である。1970 年にパソ森林保護区南西部において実験林が設定され、熱帯林研究の場となっている。

2) ウル・ラカイ村

ウル・ラカイ村はパソ森林保護区西部の境界線上にある。村の一部は黙認されているが、保護区内にあると思われる。幹線道路と舗装された一車線の道路でつながっている。道路は後述するラカイ村からいったん森林地帯を通るが、道路の両側が急に開けゴム林が現れ、コンクリートブロックに板張り、トタン屋根の土間式の家が並ぶウル・ラカイ村に至る。1976 年に、県内の母村から数戸が移住して現在に至っている。やはり、テムアン族の村であるがアイル・バニン村に比べると、はるかに周りの森林は広くかつ近い。

3) ラカイ村

ラカイ村はアイル・バニン村から幹線道路をさらに北へ 20km ほど行き、支道を 2km ほどパソの森林保護区に向かって西に入ったところにある、油ヤシ園に囲まれた村である。最初の開拓は 1935 年であり、幼稚園はあるが小学校はなく、幹線道路まで出てさらに北へ行った町まで通う。村は大きく 130 戸ほどである。上流（ウル）の森林の林縁にあるウル・ラカイ村と道路に近いラカイ村の地理的關係は、オランアスリーとマレー農民の社会・経済・文化的状況にある意味象徴的にあらわしている。後述するが、森へ執着するオランアスリーと森から離れ「近代化」の進むマレー系の農民との対照な姿が浮かび上がってくる。

4) ブキット・タンポイ村

ブキット・タンポイ村はセレンゴール州デンキル県に位置するティムアン族の村である。古い集落であるが、現在は油ヤシ園に囲まれ、森林とはまったく切り離された状態にある。森林に近いウル・ラカイ村とは対極にある村である。森林のかわりに周りには、高速道路、空港、新都市プトラ・ジャヤの生活排水路といった近代都市の維持に不可欠な施設・機能である。とくにプトラ・ジャヤは IT 企業や先端技術企業が誘致され近代的なアメニティがそろい、整備された公園のようなたたずまいとなっ

ており、未来都市の趣もある。

5) クアラ・ケニヤム村

世界最古の熱帯林を謳うタマン・ネガラ国立公園において、「オランアスリー」はジャングル・トレッキングなどとも観光の惹句の一つである。いくつかあるオプション・ツアーのなかに、オランアスリーの集落を訪問し、その生活を観察するものがある。観光収入がかれらの唯一の現金収入源であり、森の生活とはすでに完全に切り離されている。一方、国立公園のなかには「伝統的」な生活を送るグループも存在している。今回対象としたのはクアラ・ケニヤム村である。国立公園の事務所からツンベリン川 Tembeling を直線距離で 30km、スピードボートで約 2 時間、早瀬を 7 つほど越えたところにクアラ・ケニヤムがある。

6) スンガイ・ブンブン村

スンガイ・ブンブン村はマラッカ海峡にのぞむケリー島 Pulau Carey に位置している。ケリー島は平坦な島でかつては熱帯林に覆われていたが、今日はほぼ全域油ヤシのプランテーションに転換されており、島の周縁のマングローブ林もほとんど残っていない。油ヤシプランテーションは 1970 年代に植栽を開始し、現在は最新の搾油工場を備えている。島にはスンガイ・ブンブン村のほかに 5 つのオランアスリー村があるが、すべてマ・メリ族の村である。マ・メリ族は、人口が最も少ないオランアスリーであり、2003 年度の統計では、わずか 2,896 人となっている。小学校は村内にある。中高校は島のエステート内にあり、スクールバスが出ている。インド人が多く、ついでマレー人の生徒が多い。スンガイ・ブンブン村は木彫りで有名である。モヤンあるいは Hantu とよぶ精霊を彫り、他の仕事の合間に行う人も含め、木彫りを行う人は多い。

7) ウル・グロ村

国道 1 号線沿いのゴペン Gopeng の町から 12km 離れている。途中まで舗装道路があるが、最後の 5km ほどは未舗装で乗用車での通行は困難となる。セマイ族の村であり、本来焼畑農耕民とされるが、この 3~5 年の間ほとんど行っていない。ウル・グロ村の周辺は次々油ヤシに転換され、焼畑ができる森林は近くにほとんどなくなった。もともと集落の近くの森林で「慣習的に」焼畑を行い、その後ゴム林を造成していたが、5 年前に RISDA が政府から正式に利用権を得て、森林を油ヤシ園に転換した。幼稚園は政府の援助で最近できたが、小学校はない。JHEOA の提供するスクールバスでゴペンに行く途中、町の手前のマレー人の村の小学校に通っている。マレー人と一緒に学んでいるが、オランアスリーに対する蔑視が強いことが経済的な事情よりも学校へ行かないあるいは途中で退学する生徒が多いことの主な理由である。中学校・高校は、ゴペンの町にある。

(2) 調査村ごとの調査の焦点

それぞれの調査村の位置を図 1 に示した。それぞれの調査村での調査のポイントは、アイル・バニン村では長期参与調査の結果としてモノグラフ的にオランアスリーの生活と生業を森林との関わりにおいて叙述することである。幅広く多様なオランアスリー社会と熱帯林の関わりを考えると範例とはなり得ないが、それでも貴重な概観を得ることができる。アイル・バニン村の事例が地域社会と熱帯林の関係に迫る本研究のひとつの準拠軸となる。生業全般の中でも、狩猟についてとくに詳しく記述した。狩猟

こそが現在のアイル・バニン村の人々のオランアスリーとしての文化的アイデンティティの拠所となっていることがわかったからである。

ウル・ラカイ村での調査はアイル・バニン村と「森林への距離」を変数にした比較調査とみることができる。ウル・ラカイ村とアイル・バニン村を二つながらにして、マレー人の村であるラカイ村と比較する。マレー人とオランアスリーの人々の生活と生存戦略の違いを際立たすことがポイントである。ウル・ラカイ村とラカイ村の調査では子供たちの学歴と生業・職業も詳しく聞いている。次世代の動向をマレー人との比較の上で追うことで、オランアスリーの人たちの将来を考える基盤とするためである。同様の調査はブキット・タンポイ村とウル・グロ村でも行っている。クアラ・ケニヤム村でも同じ意図で聞き取りを試みたが、明瞭な未来像を結ぶだけの十分な聞き取りデータは得られなかった。

ブキット・タンポイ村はウル・ラカイ村とアイル・バニン村と「森林への距離」という同じ軸に並べ、比較することも可能である。しかし比較軸を、その裏返しとでもいい「近代都市への距離」と考えた方が彼らの生活と生業をより理解できる。クアラ・ケニヤム村の人々の生存戦略は、この点で末端にある社会となるだろう。

スンガイ・ブンブン村は、木彫という生業がはたして熱帯林の保全とどう絡むのか関心がある。社会的・経済的に周辺化されているオランアスリーの人々であるが、木彫りを媒介項として地域社会のエンパワーメントに通じ、さらには熱帯林保全へのインセンティブ導入となるという青写真は可能かという期待が調査地としてこの村を選んだ理由である。

最後にウル・グロ村である。ここでは地域住民による熱帯林保全・生態系保全が具体的に試みられている。地域住民による自発的なNPOがエコツーリズムを運営しており、アカエリトリバネアゲハの群棲地とラフレシアが目玉である。しかし大事なことは、この活動が経済的なインセンティブだけで始まったのではないことである。



図1 調査村の位置

(3) アイル・バニン村：生業全般の現状

アイル・バニン村において、1960年代、1970年代はロタン採集などの換金森林産物採集が主な現金収入となっていることが分かった(表1)。この時期にゴム植林が始まり、1980年代に入ると既にゴム採液による経済的な収益があるため、ロタン採集への依存の度合いが減ってきた。1990年代にはいり、1週間から数ヶ月単位の以前と比べると少ない期間となり、それ以降、森林産物採集からの収入は村の人々にとって副次的な収入となっている。

表1 生業の変遷

年	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005
	ダマール採集							
換金森林産物	ロタン採集							
	ゴム採液							
プランテーション アブラヤシ収穫							
 自営のアブラヤシ園							
農外就業 農外就業							

現在はゴム採液、油ヤシ収穫を生業にしている人が81%を占める。このなかには自営ゴム園において採液を行っている人、政府系のゴム園で採液作業を行っている人、マレー人や華人の所有している油ヤシ園の実の収穫をしている人も含まれている。実際には生業はゴム採液だけでなく、油ヤシ収穫もおこなうというように複合的であるので、まとめてゴム採液、油ヤシ収穫として分類した。農外就業としては、スランゴール州での道路清掃の仕事で雑草刈り掃除を行っている人が8人いる。全員が15才から27才までの結婚前の独身男性である。過去にも1998年には電気ケーブルの敷設の仕事で10人ほどが行っていた。他には家の建設、工場での仕事、農産物販売、鶏舎での仕事などがあつた。またパソ森林保護区にある調査助手としての仕事がある。現在5人が年間契約で働いており、短期で働いた人を含めると15人に及ぶ。

1) 狩猟採集

狩猟採集はかつては森林内にトラ、クマなど身に危険をもたらす大型動物が多く、重要な食糧を得ると同時に自分や家族の身を守るために身につけなければいけない技術であつた。森林に入る際には吹き矢、山刀の他に、槍も持って入っていた。最近、槍は使われなくなり、山刀さえも持たずに森林に入る人もいる。森林の中で生き延びることが彼らの誇りでもあつた。森林の動物の変化とともに人々の森林に対する認識も変わりつつある。日常的に森林を利用する頻度が減つたと同時に、狩猟の対象となる野生動物の生態自体も変化している。1960年までは近隣の森林でゾウと遭遇していたというが、森林が伐採されることにより大型動物を中心に動物自体もいなくなり、シカ、バクなど捕れなくなった動物も多い。聞き取り調査期間中に村人が狩猟で捕獲した動物を表2に示した。現在は狩猟の対象とされる動物は、断片化した森林や河畔林やゴム、油ヤシ園などにも生息できる動物が多い。狩猟の際、動物の子どもが捕れてしまった場合にはペットとしても飼われていることもあり、調査時にはリス、サル、シベット、イノシシが飼われていた。

表2 調査期間中に捕られた動物

現地名	一般名	学名
Lotong	Dusky Leaf Monkey	<i>Presbytis obscura</i>
Sikah	Banded Leaf Monkey	<i>Presbytis femoralis</i>
Kera	Long-tail Macaque	<i>Macaca fascicularis</i>
Beruk	Pig-tail Macaque	<i>Macaca nemestrina</i>
Babi Hutan	Wild Pig	<i>Sus scrofa</i>
Baning	Hard shelled tortoise	<i>Cistudo amboinensis</i>
Musang Buah	Common Palm Civet	<i>Paradoxurus hermaphroditus</i>
Kondok	Pangolin	<i>Manis javanica</i>
Jawak	Monitor lizards	<i>Varanus salvator</i>
Kandau	Flying Lemur	<i>Cynocephalus variegatus</i>
Tupai Dalik	Red Squirrels	<i>Callosciurus notatus</i>

狩猟の方法は多岐にわたる。人によって狩猟法に好みがあり、得意・不得意もある。またどのような動物を狙うかによって狩猟法を使い分ける。トゥムアンの人々の利用する代表的な狩猟道具としては吹き矢が挙げられ、アイル・バニン村で吹き矢を所有している世帯は21世帯あった。すでに狩猟を行っていない場合や、吹き矢を使えなくても、形見、シンボルとして受け継いでいる世帯も見受けられた。鉄砲も使われるが、もと軍隊経験のあった1人しか持っておらず利用は限られていた。パチンコは子供から大人まで幅広く利用されている道具で、リス、シベット、トリなど小型の樹上動物を捕まえるとき、またサルなどを追い立てる時にも使われる。仕掛けワナには様々なタイプのものがあり、畑での獣害を防ぐために、また食用、換金用に動物を狩猟するためにも使われる。

吹き矢の利用方法は竹で作られた吹管のなかに毒を塗った矢を入れてねらいを定め、吹管に口をあて、勢いよく息を吹きこむと筒先から矢が飛んでいき獲物に刺さる。獲物は次第に毒がまわって身動きが取れなくなり、樹上から落下したところで捕まえるという方法である。サルやリスなど樹上の動物を狩猟する道具として適している。吹き矢を使う猟法にはいくつかの種類がある。1人など少数で静かに獲物に忍び寄り、吹き矢でしとめる「ムインタイ *Meintai*」という猟法、これはおもに森林保護区など大きな森林で行われる。これと対照的なもので複数でサルを追い込む猟法である「マハラウ *Mahalau*」は断片化した孤立林で行われることが多く、犬なども連れ添い大声をだし、駆け回って獲物を追い込む猟法である。また夜間寝ている動物や夜行性の動物を懐中電灯で照らして獲物を狙う「ムニュールー・マラム *Menyuluh Malam*」という猟法も、獲物の通り道を見つけ陰に隠れて獲物がやってくるのを待つ「ムヌングー *Menunggu*」という猟法もある。

実際に村の人々がどこで狩猟を行っているのかを明らかにするため、狩猟場所として利用されている場所をGPSで位置情報を記録し、周辺の環境についても調査した。GPSで収集したデータを衛星画像を元に作成した土地利用図上にマッピングした(図2)。森林保護区は茶色

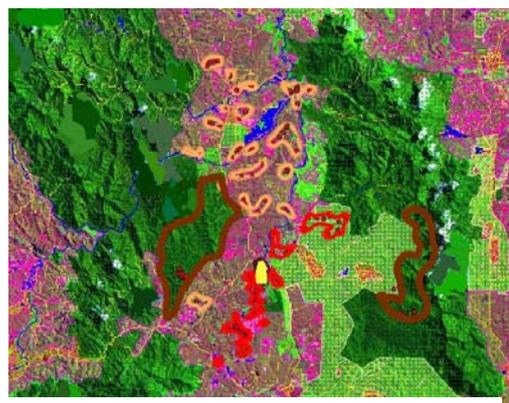


図2 村周辺の狩猟場所(ランドサット(TM1996年)画像を元に作成した土地利用図を利用)

で囲った領域ゴム園が周囲にある孤立林が肌色、油ヤシ園にある孤立林が赤色で囲った部分である。村

の人々は森林保護区のような広い森林のことを「フタン Hutan（森林）」とゴム、油ヤシ園内に残された残存林、河畔林は「プラウ Pulau（島）」と区別している。またゴム、油ヤシ園でも狩猟は行われる。マハラウ（追い込み猟）は孤立林で行われる事が多く、ムインタイ（忍び足猟）は森林で行われる。孤立林は地名などをもとにそれぞれ名前がつけられており、狩猟などの集合の際にもその名前を言えばどこで狩猟を行っているか分かるようになっていた。森林内では林内を流れる川の名前をもとに場所が分類されていた。

狩猟の頻度は人によって様々であったが、1日のうちでも、午前中にゴム採液や油ヤシ収穫などの仕事を終えてから午後に狩猟採集へ行ったり、週末や休日に狩猟採集を行うという場合が多かった。一方で、忙しくて最近では吹き矢を使った猟をしていないとの答えた家が5世帯あった。狩猟をすることに対して、趣味や道楽だという人もいた。吹き矢を使った狩猟は天候や獲物についての情報などにより判断して行われる。

（4）ラカイとウル・ラカイ：オランアスリー集落とマレー系農村との比較

聞き取りによる世帯調査の結果をもとに、マレー農村部社会（ラカイ）とオランアスリー社会（ウル・ラカイ）の社会・生業構造を比較し、その異同と変化過程の中でオランアスリー社会と森林とのかわりを浮かび上がらせることを試みた。分析のもととなる世帯調査原表は、既出であり今回のこの報告では省略した。

1) 生業構造の比較

すでにアイル・バニン村の調査で示されたように、ウル・ラカイ村での経済活動の主体も現在ではゴムと油ヤシである。ゴムと油ヤシの栽培を見てみると、14戸中11戸がゴム園を所有している。ゴム園を所有していない世帯も、戸主が高齢ですでに子供たちにゴム園を分配してしまった世帯であったり、あるいは村内の身内のゴム園で採取作業を行っていたりして、実質的には全戸がゴム園に生計を依存しているといえる。表からは、移住当初の1976年から植栽が行なわれ、以後漸次拡大植栽を行っていることがうかがえる。油ヤシは比較的新しく1998年度から植栽されている。8戸ですでに栽培が開始されているが、ここ2~3年に植栽が盛んになっている。アイル・バニン村と同じく、ゴムから油ヤシへと経済活動の比重は移行しているらしいことが分かった。

ウル・ラカイではそれでも森林に近接するため森林産物への依存は比較的高い。経済的にはロタンが重要である。ゴムが収穫可能になってロタンの採取が行なわれなくなる。いまだロタンが経済的に大きな地位を占めているのが一戸ある。また森林内の蜂蜜とプティも、副次的な、また世帯によっては無視できない収入源となっている。バイクも村全体で17台、テレビも世帯の半分以上8台ある。経済的には、後述するようにマレー農村の住人には及ばないが、ライフスタイルにおいては他のオランアスリーのグループ、たとえば国立公園内で移動生活をおくるバテックと人たちよりもはるかにマレー人に近いものになっている。

ラカイ村でも、基本的な生業構造は同じである。というよりも、ウル・ラカイに先行しているといったほうがいい。ゴムの植栽は1970年代初頭と早く、すでに2回植え替えを行っている世帯もある。そして現在では油ヤシへの移行が急速に進展している。

ウル・ラカイと異なっている点もある。ゴムの植え替えに際して接木（kawin）や新品種の導入を行っていること、また除草剤を使用していること、そしてさらに自ら植え替えの作業を行うのではなく、植え

替えそして採取の作業を RISDA に委託して行っていることである。油ヤシの栽培も農民が主体的に行っているのではなく、植え付けから収穫まで FELCRA が代行しており、農民が公社に土地を貸し出しているような形になっている。このことは社会構造とりわけ人口構造の変化と関連している。家族構成から明らかなように、ラカイ村では子供たちが村に住まず、生活の基盤を村以外のところにおいている。村に残るのは年寄りだけになり、人口の空洞化が進行しているのである。ゴムの採取には日々の労働力が必要である。一方油ヤシの収穫は数ヶ月に一度であり、ひとたび植栽すればその後恒常的な働力は必要ではない。

マレー系とオランアスリーの生業生活の違いの一つに大型・中型家畜の飼育の有無がある。マレーの集落ではうし、ヤギ、ヒツジの飼育が見られるのだが、この家畜飼育も近年は縮小・減少傾向にある。このことも農村部の労働人口の減少と関連している。マレー農村のここ 20 年の社会構造の変化は生業構造にも大きく影響を与えている。オランアスリー社会もこの影響から逃れることはできない。この社会構造の変化を端的に顕すものとして、戸主の子供たち、すなわち「次世代」の動向を二つの村で比較した。具体的には次に示す就職と教育である。

2) 社会構造の変化：就職と教育

世帯調査から、次世代がどこでどのような生計を立てているのかを示したのが、表 3（ラカイ）と表 4（ウル・ラカイ）である。便宜上、現年齢で 20 歳以上を対象とし、男女ごとに示した。

表 3 ラカイ村の次世代の動向：就職

	50代		40代		30代		20代	
	男	女	男	女	男	女	男	女
村内								
ゴム園			1	1	1			
村外								
FELCRA ほか	1	2		4	1	2		
警官・軍人			2			1	2	2
教師			1		1			1
大学在学中							1	1
事務員・公務員			3	3	3	1		
運転手			1	2	2		1	1
工場労働者				1	5	4	4	1
経営者・技術者			1	1	2	3	2	3
その他								1

実際の現居住地に関しても聞き取りを行っているが、この表では大きく村内と村外にわけたのみである。ラカイ村で明らかなのは、ほとんどの子供が村から移出していることである。村内にとどまって親世代の生業（ここではゴム園）を引きついでいるのはわずか 3 人（4%）にすぎない。さらに、移出先で農業（ゴム・油ヤシ）に従事しているのは 10 人、大部分が（81%）が村を出て農業外の仕事についてい

ることになる。かつての高度成長期の日本の農村でみられた過疎化、農村と農業の空洞化が進行しているのがマレー農村の実態である。一方、ウル・ラカイ村では3分の2にあたる27人（66%）が村内にとどまり、ゴム園（油ヤシ園）で働いている。村外に移出しても農業を生業としている人も多く、その割合は全体で8割（33人）を越えている。皮肉なことだが、ゴム園（油ヤシ園）を親から引き継ぎ生計を立てるというマレー農村のライフスタイルはオランアスリー社会において継承されているのである。

表4 ウル・ラカイ村の次世代の動向：就職

	50代		40代		30代		20代	
	男	女	男	女	男	女	男	女
村内								
ゴム園ほか	1	1	1		3	5	8	8
村外								
ゴム園ほか	1	1	3	1				
工場労働者							2	3
その他				1				2

特に村外（都市部）への移動の導線となっているのが教育である。高い学歴は都市部での高い所得を約束する。経済的に豊かになれば子供の教育に力を注ぐことになる。

表5 ラカイ村の次世代：最終学歴。

	50代		40代		30代		20代	
	男	女	男	女	男	女	男	女
大学卒					1		1	1
大学在学中							1	
STPM				1	2			
SPM			2		4	2	3	4
高校中退			1	1	1	3		2
中卒					2		6	
中学中退			3	5	4	2	1	
小卒	1	2	1	2	1	3		
小学中退			1		1	1		
未就学				1		2		1

次世代の教育状況においても二つの村では際立った違いがみられる（表5、6）全般的に教育水準は年々上がっているのだが、とくにラカイ村でその傾向が著しい。大学在学中の子供の中には、日本・エジプトに留学中のものもいる。ウル・ラカイでは20代以上の人を対象としたとき、学校に通った経験のない人が半数以上（21人）であり、30代以上で中学を卒業しているものはいない。ようやく20代で高校卒業をしたものがあるくらいである。ウル・ラカイでは子供は貴重な労働力である。20代で顕著であるが、女性の教育程度が高いのは、比較的若年からとくに男子で子供たちが労働力として期待されている

ことを反映している。

表 6 ウル・ラカイ村の次世代：最終学歴

	50代		40代		30代		20代	
	男	女	男	女	男	女	男	女
大学卒								
大学在学中								
STPM								
SPM								3
高校中退								1
中卒								1
中学中退					2		4	2
小卒						1	1	1
小学中退						1	2	1
未就学	2	2	4	1		4	3	5

4) マレー社会との比較

マレーシアの農村社会はここ 20 年間で大きく変容してきた。農村社会は変容し、都市化が進行してきている。ゴム・油ヤシ栽培は今日でもいまだ主力産業であり、農村部の代表的景観である。しかしその経営様式はかつての小農が主体であった労働集約的な栽培から公社が主体となった省力的なプランテーションへと大きくかわってきた。農村から都市へと労働力が移動し、農村部では労働力が不足するようになっている。今年度の調査では、マレー農村における変化の実態をマレー系とオランアスリーの二つの地域社会を比較しつつ明らかにした。森林を中心としたエコシステムマネジメントも、当然ながらこの大きな社会経済的構造変化の中で考える必要があり、とりわけ地域社会における生態系管理へのインセンティブ導入を図ろうとする場合は十分考慮しなければならない点である。

今回調査対象としたオランアスリー地域社会でもマレーシア農村部の大規模な生業構造の変化に呼応するように、すでに収入の中心となる生業はダマール、ロタンなどの換金森林産物採集からゴム採液、油ヤシ収穫、道路清掃業などの農外就業へと変わってきている。少なくとも経済活動では狩猟や森林産物の採取といった活動は重要でなくなってきた。せいぜい副次的な収入源であり、なかば余暇的な活動である。この点で、森林への依存はかつてほど強くないことも同時に明らかになった。しかしながら狩猟や森林産物採取はオランアスリーの人々にとって文化的・精神的ともいえる別の意味を持ってきているのではないと思われる。彼らのアイデンティティに関わる象徴的な意義だとしてもよい。そして、この文化的側面をどう評価するかで、オランアスリーと森林との将来のあり方について見方がかわってくる。

もともと調査対象であるテウムアンの人々は、オランアスリーのさまざまなグループの中でもマレー系の最も近いグループである。生業・生活習慣で共通する点が多く、さらにイスラーム化が進んだ結果、宗教まで共通するようになってきている。テウムアンのアイデンティティに関して信田¹⁾は、テウムアンとオランアスリーを分けるのは精神的に森林に関わっているかどうかであるとしている。森林を忌避

するのがマレー人であり、それ以外の余集団がオランアスリーなのである。オランアスリーであることに「血統」さえも要求されない。極端な場合、実際にそのような例が見られるのだが、中国人だろうがインドネシア人であろうが、森林との関わる生活を送るかぎりオランアスリーなのである。

このオランアスリーのアイデンティティという視点にたてば、経済的にはさほど重要でない狩猟や森林産物採取の別の側面が浮かび上がる。狩猟においては吹き矢などを使うには高い技術が必要であるし、技術を習得し磨くことは文化的・精神的価値の一つとなっている。吹き矢を巧みに使いこなし獲物を得ることは、マレー系農民に比べ社会的・経済的劣位にあるオランアスリーが誇れる点の一つとなっている。森林に知悉したオランアスリーでないと、ゴム園や油ヤシ園の間に残る孤立林を頻繁に利用し、樹上の獲物を獲得することはできない。オランアスリーの世帯に必ずある吹き矢は「武士の刀」に相当するといってもよい。同じ狩猟でも、たとえばセンザンコウやカメ・スッポン・カエルなど商品価値の高い動物を吹き矢によらない方法で捕まえるのとは意味合いが違うのである。

一方、森林産物採取も経済的側面だけの理解は不十分である。かつては樹脂やロタン採取は重要な現金収入源であった。しかし、現在ではゴム・油ヤシ栽培というより効率的な現金収入源がある。それでも今日、森林産物を採取すること自体に新たな商品価値が生まれつつあるからとも考えられる。「オランアスリーの採取した」森林産物という付加価値である。たとえばオランアスリーが採取しているプテイは元来栽培可能な木であり、実際ジャワなどではごく一般的に庭先で植栽されている。しかし森林のなかから「オランアスリーが採取した」プテイは、都市居住者にとって特別野性味が強く精力がつく「自然食品」である。蜂蜜にしても同様で、養蜂家の蜂蜜とは比べ物にならない「健康食品」である。その端的な例が薬草である。森の精気が濃縮している薬草は近代化のなかで特別な価値を持ってきた。オランアスリーの呪術師の元には、休みの日になると診断を受け「薬」を受け取るために疲弊した都市住民が列をなしている。都市化・近代化のなかで、森が生活に占める位置は先進国の都市居住者と近いものになりつつある。森とは「大切に残さなければならない生態系」であり、時たま訪れる限り「心地の良い自然」であるが、その周辺に住むことは避けたい存在なのである。

こうした動向のなかで、オランアスリーは「森の民」としてのイメージが相対的に強化されている。森林産物に対する根強い需要のなかで、「オランアスリー」が商品化されているともいえる現象がその一つの現れである。現実にマレーシアの国民のなかで、もっとも森林に近いところで生活するオランアスリーの人々を、発展と開発の中で森林に取り残され人々としてとらえるのではなく、地域住民へのエコシステムマネージメントのインセンティブを喚起する際に、むしろ貴重な媒介者として積極的に活用する政策・制度が必要だと思われる。森林の保全を行える地域社会は、今日のマレーシアではオランアスリー社会しかないのである。

5) 多様性の中の共通項

ブキット・タンポイ村、クアラ・ケニヤム村、スンガイ・ブンブン村、ウル・グロ村で所帯調査（家計調査）を行い、各所帯の「変異」と「ばらつき」について分析を行った。参考までに、EPU（マレーシア経済企画庁）²⁾によると、貧しい（miskin）家庭は、一家の月収入が RM609 以下か、あるいは家族一人当たりの収入が月額 RM147 以下である。極端に貧しい（Termiskin）家庭は一家の総月額収入が RM392 以下か、あるいは一人当たりの収入が月額 RM94 以下である（EPU 2006）。所帯調査では過少申告になっている可能性は大いにあるが、それでもオランアスリーの人々の相対的にかなり貧しいという経済状況を知る手がかりとなる。

ブキット・タンポイ村は先に述べたように近代によって森林から切り離された村である。村人はウル・ラカイ村やアイル・バニン村のように、油ヤシ園・ゴム園を小規模に経営している。しかし、油ヤシの植え替えには積極的でなくなっている。すでに主要な収入源は近代都市での労働によるようになってきているからである。空港の清掃人や高速道路の建設労働者などの職種の中で、「ランドスケープ」と呼ばれる職種が象徴的だ。「ランドスケープ」というなにやら高等技術職のような仕事は、実は森を切り開いてできた近代都市プトラ・ジャヤの道路の清掃作業のことである。空港での清掃人の仕事もそうだが、近代の物理的接近はオランアスリーの人々を近代社会の底辺に組み込んだだけとなった。その結果、たしかにブキット・タンポイの人は経済的に裕福になり、物質的にも恵まれている。このことは国立公園内のパテックの人と比べるといっそう鮮明になる。

しかし、彼らとて外部の近代都市居住者と無関係なわけではない。現金収入源は沈香の採取である。良質な沈香の木を探しあてると 300 ドルから 500 ドルを得ることができる。2003 年に訪問したときにはビニールシートのテントの中にはラジカセがあり乾電池が散乱していた。それが 2007 年に再訪したときには小型発電機を電源としたビデオデッキとテレビになっていた。彼らはオランアスリーのなかでも、もっとも「伝統的」な生活を送っているグループである。繰り返すが、にもかかわらず「外の世界」とまったく無縁でなく、「近代文明」世界は彼らときわめて近いところに存在しているのである。

スンガイ・ブンブンの人は自発的に環境保全と生活の安定のための NGO (Tempoq Topoh) を立ち上げている。人々は海岸部に近いところに生活圏をもっており、男性はかれらの生命観をモチーフとした独特の木彫で知られ、女性はパンダヌスの葉を織った織物で知られている。木彫の原材料はかつてはプライ (*Alstonia scholaris*) であったが、湿地森林が油ヤシ園に転換されプライが枯渇した後はマングローブのニリ *Xylocarpus moluccensis* を利用している。さらに、木彫りの原料となるニリの大木は少なくなり、また、織物の原料であるパンダヌスも枯渇しつつある。一方、海が汚れ漁獲高が減少し、漁業から木彫りに転業する人がかなりいる。次世代の動向をみると、漁業を継ぐ人はまったくいず、木彫りに将来の可能性を見出している。

こうしたなか、女性グループは積極的にパンダヌスの植え付けを試み、木彫の原料を供給するマングローブ林の保全を働きかける NGO を立ち上げたのである。木彫りは一部の愛好家には知られているが、マ・メリの人々自身が販路をもたないため、仲買人に安く買い叩かれている状態である。そのため生産組合と販路の開発も将来の活動の課題である。

ウル・グル村では生態系を収奪するのではなく、持続的に利用するため、やはり NGO を立ち上げている。民族名 SEMAI と重ねた名称の Sehabat Ekopelancungan Memuliraaan Alam Indah (Friends of Ecotourism and Conservation of Beautiful Nature) であり、2004 年 8 月 17 日に設立された。Malayan Nature Society のラフレシア保護プロジェクトの受け皿として誕生し、現在村の中の 19 名が参加している。一日ガイドすると一人 RM22 を受け取る。現在 SEMAI は外部資金を受けていない。活動を持続させるには安定した数の訪問者が必要である。図 3 と図 4 にこの 2 年間の実績を示した。季節により変動は大きい。しかし海外（主にシンガポール）からも含めて、訪問者は結構多い。この地域の人々の自然に対する関心が次第に高くなっていることを示している。ウル・グロのこういった自然資源の存在はまだよく知られていないが、外部者に認知させるようなメディアーション活動が SEMAI の活動の大きな支援となると考えられる。

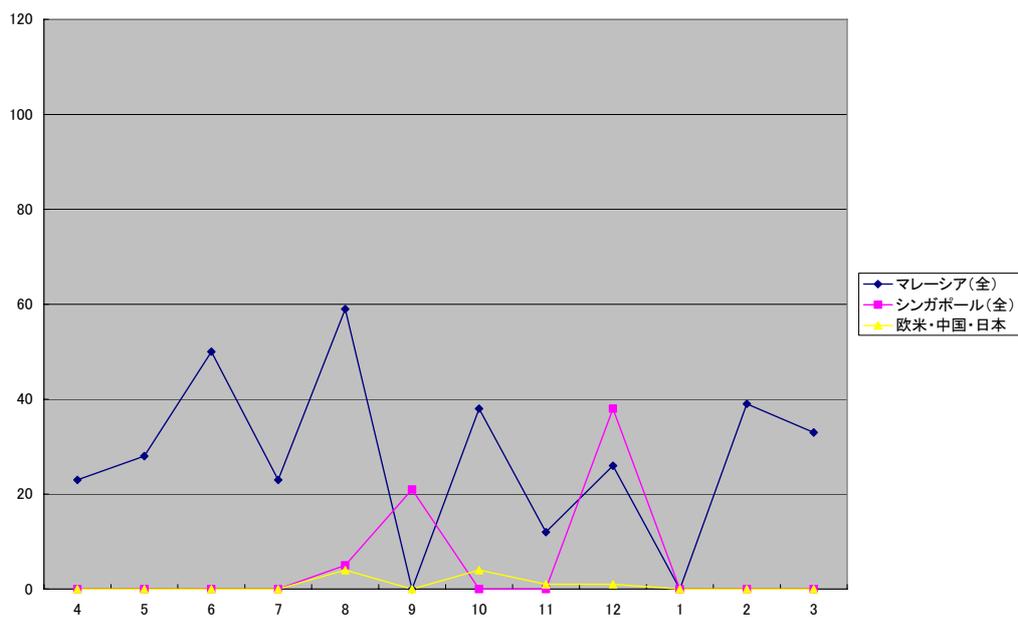


図3 2005年度 Ulu Geroh (ウル・グル村) 来訪者数。横軸は月、縦軸は来訪者数(人)を示す。

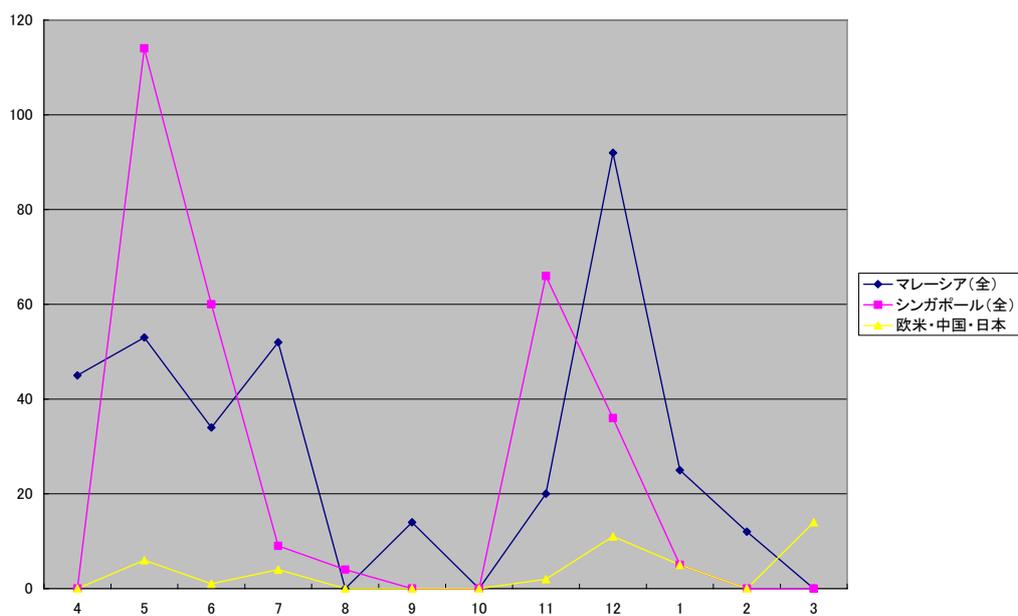


図4 2006年度 Ulu Geroh 来訪者数 (説明は図3参照)

5. 本研究により得られた成果

(1) 科学的意義

広域化・スケールアップという課題が設定されたためだが、これまでの長期間の参与観察という人類学的手法では行い得なかった、民族横断的な比較調査を行うことができた。

(2) 地球環境政策への貢献

地域社会のアイデンティティを確立するためには外部から経済的支援が必ずしも必要ではないことが明らかになった。むしろ孤立化しがちなオランアスリー社会をどのようにして「外世界」と結びつけるのかという点が浮き彫りになった。木彫りの販路の開拓にしてもマングローブ林の保全活動にしても、エコツーリズムの参加者を増やすのも、オランアスリーの人々が単独で行っても効果が薄い。オランアスリー社会と外の世界とつなぐという役割が外部のものに期待されているのである。ここでの外部者とはオランアスリー社会以外のマレー国民も含まれる。これまでの研究で、マレー農村社会がかつての日本の農村と同様の急激な過疎化状態にあることも再認識されたが、森林に関してはマレー人はもはやまったくの外部者となっている。こうした点は今後地域社会と調和しつつ、グローバルレベルでの生態系や多様性保全施策を進める上で非常に重要な視点であり、これまでの熱帯林研究や熱帯地域での自立型・持続型社会の研究では強調されてこなかった点である。

すでに森の外部者となった近代都市に居住する農村出身のマレー系の人々の間では、近年では開発一辺倒ではなく、先進国と同じ環境保全という考え方が徐々に浸透し、熱帯林保全への関心が高まりつつある。地域社会における生態系管理へのインセンティブ導入を図るときには、森に近いオランアスリー社会よりも、こうした環境保全意識の潜在的に高い人々を巻き込んでの「協働」の必要性を強調したい。

6. 引用文献

- 1) 信田敏宏 京大出版会 (2004)
「周縁に生きる人々—オランアスリーの開発とイスラーム化」
- 2) Economic Planning Unit (EPU), Prime Minister's Department, Putrajaya.
“Ninth Malaysia Plan 2006-2010” <http://epu.jpm.my/rm9/english/Chapter16.pdf>

7. 国際共同研究の状況

特になし

8. 研究成果の発表状況

(1) 誌上発表

<論文(査読あり)>

- 1) D. NAITO, The Proceeding of The 7th Kyoto University International Symposium, 2005 Coexistence with Nature in a ‘Glocalizing’ World – Field Science Perspectives-, Hotel Nai Lert Park, Bangkok, Thailand, November, 207-210 (2005)
“Development of Forest Certification Schemes in Malaysia”,
- 2) D. NAITO, D. K. ABE, T. OKUDA, Hood Salleh. Tropical Forests: Mediating Ecological Knowledge and Local Communities, Kyoto University Press (2007)
“The changes of subsistence activities among Temuan communities in Negeri Sembilan, Peninsular Malaysia - focus on hunting and gathering-”

<査読付論文に準ずる成果発表>

- 1) W.de Jong, L.Tuck-Po, ABE K. In Lye Tuck-Po, Wil de Jong, ABE Ken-ichi eds., The Political Ecology of Tropical Forests in Southeast Asia: Historical Perspectives, Kyoto University Press & Trans Pacific Press:

- 1-28 (2003)
 “The Political Ecology of Tropical Forests in Southeast Asia: Historical Roots of Modern Problems”
- 2) ABE K. in Lye Tuck-Po, Wil de Jong, ABE Ken-ichi eds. The Political Ecology of Tropical Forests in Southeast Asia: Historical Perspectives, Kyoto University Press & Trans Pacific Press: 133-151 (2003)
 “Peat Swamp Forest Development in Indonesia and the Political Ecology of Tropical Forests in Southeast Asia”
- 3) 阿部健一 Tropics 特集号(2003)
 “境界を問うー東南アジアの自然保護と地域住民” 国際ワークショップ Boundary Problems: Nature Preservation and Local Residents in Southeast Asia
- 4) Lim Hin Fui, ABE Ken-ichi, Hood Hj Nohd Salleh, Naito Daisuke, in Annual Report of the NIES/FRIM/UPM Joint Research Project on Tropical Ecology and Biodiversity 2003: 90-97 (2004)
 “Basic Research on Local Incentives for Ecosystem Management ”
- 5) 阿部健一 科学 75 (4) : 486-489、岩波書店(2005)
 「生態地域主義という考え方：新照葉樹林文化論」
- 6) 阿部健一 季刊民族学 112: 13-22 (2005)
 「多様性に、人類学的祝福をー地域で考える自然と文化」
- 7) Hood Hj Mohd Salleh, D. Naito, K. ABE, T. OKUDA Annual Report of the NIES/FRIM/UPM Joint Research Project on Tropical Ecology and Biodiversity. (2004)
 “The Changes of Subsistence Activities among Temuan Communities in Negeri Sembilan, Peninsular Malaysia- Focus on Hunting and Gathering”
- 8) ABE K. In ABE Ken-ichi ed., Mediating for Sustainable Development in the Mekong Basin: JCAS Symposium Series 25:1-8 (2006)
 “Mediation in Mekong River Development”
- 9) 杉島敬志、中村潔編 現代インドネシアの地方社会 ミクロロジーのアプローチ NTT出版 67-88 (2006)
 「『開発』を振り返るー中カリマンタン泥炭湿地林開拓移住者のミクロロジー (阿部健一)」
- 10) W. de Jong, L.Tuck-Po and ABE K in Wil de Jong, Lye Tuck-Po and Abe Ken-ichi eds. The Social Ecology of Tropical Forests: Migration, Population and Frontiers:1-24 (2006)
 “Migration and the Social Ecology of Tropical Forests”
- 11) ABE Ken-ichi in Wil de Jong, Lye Tuck-Po and Abe Ken-ichi eds., The Social Ecology of Tropical Forests: Migration, Population and Frontiers. 247-261 (2006)
 “We Come to Grow Coconuts, but Not to Stay: Temporary Migrations into the Peat Swamp Forest of Sumatra”
- 12) Deanna Donovan, Wil de Jong, ABE Ken-ichi, in Deanna Donovan, Wil de Jong, ABE Ken-ichi, eds. Extreme Conflict and Tropical Forests. 1-16 Springer (2007)
 “Tropical Forests and Extreme Conflict,”
- 13) 日高敏隆・秋道智彌編 「森はだれのものかーアジアの森と人の未来」 地球研業書 昭和堂 109-133 (2007)
 「だれのための森か (執筆担当：阿部健一)」

- 14) 秋道智彌編 「図録メコンの世界—歴史と生態」弘文堂 (2007)
 「変動する世界」、「生態史の世界 1. 商品と国境交易 (4) 天然樹脂の採取と森林保全」、「生態史の世界 2. モンスーン地域の資源管理 (3) 退耕還林 (執筆担当：阿部健一)」

<その他誌上発表>

- 1) 阿部健一 月刊みんぱく 7月号 20-21 (2004)
 「森の巨人はデリケート—生き物博物誌・フタバガキ〈ボルネオ島〉」
- 2) 佐々木高明、秋道智彌、阿部健一 科学 75(4) : 428-438 岩波書店 (2005)
 「鼎談 照葉樹林文化論のひろがり」
- 3) 阿部健一 (特集責任編集) 科学 75(4):424-425 岩波書店 (2005)
 「特集：新照葉樹林文化論—生態文化に根ざした社会に向けて」
- 4) 内藤大輔 第118回日本森林学会大会学術講演集 日本森林学会 (2007)
 「マレーシア・サバ州キナバタンガン川流域における地域住民の林業への関わりの変遷」

(2) 口頭発表

- 1) 阿部健一 HEP FIVE 学習塾 (2003)
 「もりのひと：オランウータンのいる森」
- 2) 阿部健一 「地域連関の構図」連携研究会 京都大学東南アジア研究所 (2003)
 「森をめぐる権利：ポスト・スハルト期の国家と民族集団」
- 3) 阿部健一 「地域研究コンソーシアム設立準備ワークショップ 地域研究を？する：新しい地域研究への模索」学士会館 (2004)
 「地域とどう関わるか：実践とポジショニング」
- 4) Naito, D. Symposium on Orang Asli: Social and Community Well Being, Bilik Mesyuarat Bersama LESTARI/PPS/IKMAS, organized by Institute for Environment and Development (LESTARI), Universiti Kebangsaan Malaysia, February (2004).
 “Orang Asli and forest certification in Malaysia”
- 5) 阿部健一 国立民族学博物館友の会講演会 国立民族学博物館 (2005)
 「文化・生物の多様性—国際的な共通認識のために」
- 6) 内藤大輔 バンギ・フィールド・ステーション連続ワークショップ, Sudut Wacana, Institute of the Malay World and Civilization(ATMA) (2005)
 「先住少数民族トゥムアンの生業変容に関する調査研究」
- 7) 内藤大輔.日本マレーシア研究会関西例会 「生業経済からみるマレーシアの<辺境>」(2005)
 「マレーシア半島部ヌグリ・スンビラン州における先住少数民族 族トゥムアンの生業変容」
- 8) 阿部健一愛・地球博メッセージイベント 愛・地球会議 4月愛知万博 (2005)
 「文化・生物の多様性と国際レベルの共通認識づくり」
- 9) ABE K. UNESCO/JCAS International Symposium and Experts Meeting (2005)
 “Exploring Linkages between Cultural Diversity and Biodiversity: Safeguarding the Transmission of Local & Indigenous Knowledge of Nature”
- 15) 内藤大輔、阿部健一、奥田敏統、Hood Salleh 第15回日本熱帯生態学会 (2005)

「マレーシアにおける森林認証制度と地域住民」

- 11) NAITO, D. ABE, K., OKUDA, T. and Hood Salleh presented at International Symposium Eco-human Interactions in Tropical Forests (2005)
“The Changes of Subsistence Activities among Temuan Communities in Negeri Sembilan, Peninsular Malaysia: Focus on Hunting And Gathering”
- 12) Naito, D. International Conference on The Indigenous People 2005 – The Indigenous Population: Survival of Modern Living. (2005)
“The Ecological Knowledge of the Orang Asli and its Application to Future Environmental Sustainability: A Case Study of Temuan in Jelebu, Negeri Sembilan,”
- 13) ABE K., NAITO D., and OKUDA T. presented as poster session (2005)
“Comparative Study on ‘Forest’ Dependency and Forest Product Use among Malay and *Orang Asli* Communities in Peninsular Malaysia”
- 14) ABE K EXPO2005 AICHI, Japan International Conference ”Mediating for Sustainable Development” (2005)
「持続可能な開発の媒介者たち」
- 15) Naito, D. The 7th Kyoto University International Symposium (2005)
“Development of Forest Certification Schemes in Malaysia,”
- 16) Naito D, ABE K Conference on Forestry and Forest Products Research 2005 (2005)
“Changing Forest Use in Indigenous Community in Relation to Rural Development”
- 17) 阿部健一 平成 17 年度総研大国際シンポジウム (2006)
“Regional Perspectives for Global Issues: Forest History in China”
- 18) 阿部健一 第 5 回地球研フォーラム (2006)
「誰のための森か？」
- 19) ABE K. 第 10 回民族生物学会国際会議 (2006)
“Biodiversity for Community Development : Mediating between Cultural Preservation and Development”
- 20) Naito, D. International Symposium: ‘Indigenous Communities: Voices towards Sustainability’ (2006)
“The Rural Development and Transition of Indigenous Community in Negeri Sembilan, Peninsular Malaysia”
- 21) Naito, D. Experiencing Development at the Margins in Malaysia: Views from Minorities, Peripheries and Women, Bilik Seminar (2007)
“The Orang Sungai Involvement in Rural Development, Kinabatangan, Sabah”

(3) 出願特許

なし

(4) シンポジウム・セミナーの開催

なし

(5) マスコミ等への公表・報道等

- 1) 読売新聞 (2006年4月13日、夕刊「コーヒーから見る世界問題」)
- 2) 京都新聞 (2006年10月11日、「平和で進む熱帯林伐採」)